

欲せば喜馬拉亞脈の峻嶮なる之を四川雲南の方角より経過すべき様なし、故に海運の便なき古代に於ては東洋二大國間の交通は常に路を大陸中央の高地に取れり、彼の唐僧玄奘が佛教を求める所欲して印度に至りしや、西の方玉門關を出て戈壁^{ゴヒ}の沙漠を横断し、天山と喜馬拉亞と相接する處なる葱嶺(ボロ山)を過ぎて、アムダヤン^{アムダヤン}の西北隅より印度に入れり、又伊人マリコボロ^{マリコボロ}が元朝に至りしも同じく此通路を取れり、故に支那の隣邦と稱すべき印度、ベクトリヤは共に數千里の遠きにあり、佛國が伊班、英、獨と境を接するが如き狀は支那人の推量し能はざる處なりき。

此位置にあり此構造を有する支那に於て達發せし文明は如何、余輩は歴史に依らずして其何たるかを豫定するを得るなり。
孤立なり、統一團結なり、是れ支那の地理學上の位置と構造とを有する

國に於ては避くべからざる結果と云はざるを得ず。

自國を稱して中國中華と云ひ、外邦を稱するに悉く蠻夷を以てす、吾人は支那人の無識と自重とを笑へり、然れども是れ彼等が強大なる隣人が彼等の爲めに辨ずる處なり、支那人に貴公子の自尊と餘裕あり、清朝曾て隙を英國と開くや、彼等の無邪氣なる天子西征して陸路より英國を襲はんと思へり、四方二千哩に亘る大國の民已に足るを知て外に待つを知らず、中華の地、離れか之と雌雄を爭ふものあらんやと、權力平均(Balance of Power)なり、外交政略なり、是れ六千年間支那人の脳裡に浮ばさりし問題なり、支那の歴史が比較的に平穏なる、其文明の單純なる、皆其地理學上の位置の孤立せるに依らざるはなし。

外に對する遠くして内に接する密なるあり、殆んど四角形をなせる一

國國、平原の四方に連亘するありて山脉の之を分断すること少なく、加ふるに大河の幹流支流が運輸交通の便を供するあり、團樂四通八達の地、是れ統一を促がさるを得んや、支那の平坦なる勿論露西亞の水平なるにあらず、然れども之に山野の不同あるは反て健全なる一致を促かし、物産の雜駁、風俗の差異は國民協同の媒介にして、露國に饋物の欠乏するが如き、水力の使用し得べきなきが如きは其強大なるも尙ほ自國に足りて外に仰ぐの必要なきを得さらしむ。

故に、統一は支那の自然なり、支那を分離せんと欲せしものは自然に逆ひしものなり、春秋割據の有様は支那に於ては永續すべきにあらず、故に秦一たび天下を統一してより分離は稀にして、統一は常なり、歐洲に於ては國民分離して天下始めて治まり、支那に於ては諸侯割據して干戈絶ゆる間なし、漢楚天下を兩分せんとして能はず、三國天下を争ふ四

十四年にして又一統に歸す、晉の天下南北朝となりて唐に合せられ、五代の紛亂五十餘年にして宋代となりて終る、支那を分割するの難は歐を一統するの難きが如し、シャーレマンの理相ナボレオンの希望は支那に施こし得べくして歐洲に施こす能はず、支那歴史の趨く所は歐洲歴史と正反対なり。

故に、分離と競争とは歐より來り、一致と合同とは支那の產也、自由と獨立とは前者に伴ひ、和合と從順とは後者より出づ、西洋の社會結晶は個人的盟約に成り、東洋の國家成立は家族的團結に成れり、シャーレマンの家長政畧は直ちに敗れたり、周公の撰賢上功主義は支那人には容れられざりき、米人の理想は王なきの國監督なきの教會(Country without a King, Church without a Bishop)なり、支那人の治國平天下は尊親親主義に依る、前者に歐羅巴地理の分割限りなきあり、後者に支那地理の圓團な

るあり、歐亞兩主義の相異なるマクニの兩極の性の異なるが如し、故に歐の長は亞の短にして、歐の欠は亞の有なり。

分離は競争を生み、競争は獨立自由を生ず、物雜駁にして美術科學あり、科學ありて進歩あり、分離の健全なる結果は進歩なり。

然れども分離其物は虛無的なり、紛爭分離より來り、確執紛爭より來る、不尊なり、不敬なり、懷疑なり、破壊なり、是れ分離の病理的結果なり。

團結は和合を生み、和合は從順尊親を生む、忠孝の道なり、淑德の美なり、敬虔なり、團結の健全なる結果は建設保存なり、然れども團結其物に停滞の性あり、怠慢團結より來り、腐敗怠慢より生ず、物一様にして抽象力なく、抽象力なくして理想あるなく、理想なくして美術科學あるなし、科學なくして進歩なし、團結の病理的結果は濫濫なり、回顧なり、因循なり、頑愚なり、退歩なり。

分離の利害は歐のものなり、團結の利害は亞に屬す、歐の欠乏は團結にあり、亞の弱は分離性の足らさるにあり、完全なる文明は歐が亞と婚を結んで後にあり。

支那文明の長と短とに就ては余輩此處に嘆々するを要せず、其能く四萬億の生靈を統一する、其國民の體魄にして穩和なる、其長を敬し上に仕ふるの切なる、共に萬國の仰ひて龜鑑となすに足る、然れども其大理想に乏しきと、其美術の卑陋なると、其外形の禮に流れ易くして眞善を認むるの力弱きこと、其進歩の遲鈍なること、是れ支那主義の特質として吾人の常に目撃する處なり、東洋の開發は之に西洋主義を注入して、團合の害を排除するにあり、恰も西洋の革新は東洋主義を和して其分離の害を去るにあるが如し。

支那印度兩文明の比較

百七十八

東洋は支那印度の兩中興より成る、二者面積殆んど相同じく、人口各億を以て算す、之を離隔するに喜馬拉亞の大山系あり、之に住するに蒙古「アリヤン」の兩異人種あり、其相距るや遠く、其相異なるや大なり、然れども是れ世界國民の一好對、東洋の大家族は此二者の合璧を以て成る。

一は大嶺の西南麓にあり、氣候赫灼、植生繁茂を極め、之に住するに抽象力に富める「アリヤン」人種を以てしたれば、熱帶的の早熟と共に形而以上的の文明を呈せり、一は其東北面にあり、氣候溫和五穀豐熟し、之に住するに實際力に富める蒙古人種を以てしたれば、溫帶的の生熟と形而下的の文明を產せり、印度人は、軀を忘れて思考の全力を靈に注ぎ、支那人は靈に意を介せずして軀を事とせり、前者は未來を重んじて後者は現在を以て足れりとし、彼は靈界に伸びんと欲し、是は此地に安堵せん

とせり、彼は無限を追ひ求め、是は實際を探て止まず、兩性の相異なる實に男女の別あり。

支那印度兩文明は二者共に相容れざるが如し、然れども兩者に東洋的の同一性あり。

他邦より孤立して單純獨特の性を有する其一なり、單獨の方向に伸張して齊均を欠くこと甚しき其二なり、各其本領に於て統一を専らとせし其三なり、二者目的を異にして方法を共にせり、總括を求めて分解を避けし一點に於ては二者共に西洋文明の正反對の方向を取れり、綜合は東洋の特性なり、而して支那は政治的に綜合し、印度は靈智的に綜合せり、中古時代の歐洲人が渴望して止まがりし一帝王一法王は東洋にては太古より個々に實行されしなり、即ち支那は「キベリシ」靈の理想の如く始終一帝を戴き、印度は「ケルフ」靈の理想に叶ひて常に一宗教の

方向を取れり、然れども兩黨の希望たりし政教一致は尙ほ人類未來の事業として存す。

今世界三大文明の特質を擧ぐれば左の如し、

歐羅巴文明——政界、教界に於ける分離、
支那文明——政界に於ける綜合、

印度文明——教界に於ける綜合、

三者混合相同化して始めて完全なる文明あり、一は他の二者に頼らざれば其欠を補ふ能はず、人類の希望は三者の調和一致にあり。

第九章

日本の地理と其天職

海端有國名扶桑
綿々皇統傳萬世
士重信義輕利
孤棹嘯風碧湖舟
花香一目千樹春
月高八百八島秋

是れ我等の愛する日本帝國なり、東大陸の東端、太平洋の西北隅、一錬の島嶼半月形をなし、亞細亞大陸を後陣に控へ、哨兵線を大洋中に張るが如し、帝國の面積十五萬方哩餘と稱す、即ち英に優る二分佛と獨とに劣る各四分班よりは小にして、伊よりは大なり、人口は四千萬を算す、即ち英よりも多くして、獨よりも少く、稍や佛と相匹敵す、地球上一大國民



第五圖

す寫體りよ[學文地本日]て得を踏承の者著

となりて雄飛し得るの土と人とを有す、其位置たるや北太平洋の中和を占め、熱帶の終る所に始より寒帶の始まる所に終る、山に芙蓉あり、其秀瑞のブランク・メタホーンに及ばずと雖も其姿の優と正とは衆峰の備ひすべきなし、其河に石狩あり、英のテームス大にして民の遐勉は能く之に日本海の船舶を輻湊せしむるに足る、其隅田は蘇のクライドの水量を有し、巨艦艨艟の之に出入するを得せしむべし、其淡水に琵琶湖あり、端のセチベに均しき水面を有し、孤桿舟を浮べて風月に吟じ、技工水を利用して民福を致し得べし、一國民を任るの要素は一として備はらざるはなし、

日本帝國一名之を蜻蜓洲と云ふ、蓋し其南北に長くして東西に狭く、中央に太くして兩端に尖縮するの状、渠の脈翅虫に類似する處あるが故

に若か稱せしならんか、其頭部は能登半島とせんか、其背部隆起する所を甲信の高地とせんか、其腹と尾とは伊豆半島が大島八丈として海に盡る所とせん、其右翼は東北三道并びに北海道にして、其左翼は關西西南の地と見做さん、其後翅後縫に刻入のあるは東海の濱に屈曲港灣多きを示さんか、翅脈に縱横あるは我國山脈の方向を示すが如し、前後兩翅の分る所は西南に内海、東北に青森灣のあるが如し、余は實に蜻蜓洲の名を愛するなり、吾人の先祖は卓見なりし、彼等は能く脈翅蟲類の構造を究め、帝國地形の概略を示せり、吾人開明に進める、彼等の子孫は此詩歌的名稱を廢すべからざるなり。

若し日本國を天女に擬せんか、窈窕たる彼女の仙姿は大陸に背し大洋に面し、高麗半島の盡きる邊より加察^{カムサツカ}加の南角に至る迄大洋面を掩ふが如し、彼女は頭を北海に墜げ、胸を東北の山野に持し、腹を關東の郊原

に据へ、富士山帶を以て帶せられ、尾瀬の原野を下腹となし、幾内に下肢となり、山陰山陽の一足を後にし、南海西海の他足を前に進むるが如し、彼女は旭日に面し、夕陽に背す、東向して望むが如し、西背して弱者を擁するが如し、彼女の麗姿に聲あるが如し、耳あるものは焉ぞ聞かざるを得んや。

日本國の海岸線は屈曲東岸に多くして西岸に少し、即ち本州を以て論せんに馬關より内海東海を沿ふて陸奥の三厩に至る迄海岸線の延長は三千二百十二哩なり、然るに三厩より西海岸日本海に沿ふて馬關に至る迄は僅かに一千五百九十五哩に過ぎず、東海に松島灣、伊勢灣、大坂灣、内海等の深く陸地に蝕入するあり、加ふるに鹽釜、横濱、清水、四日市、神戸等の良港を有し、水輸の便實に備はれりと謂ふべし、是に反して西海岸に於ては屈曲港灣甚だ乏しく、纔に能登半島の西北に向て突出するあ

りて伏木の一港を日本海の波濤より防禦するに足るのみ、後志小樽(是又良港と稱すべからず)を去て西南六百里長門の赤間關に至る迄一良港灣の西海岸を恵むあるなし、其羽後の舟川は風波を避くるに便なれども陸運に難なり、其土崎、酒田、新潟、直江津等は大河に濱し沃野を擁して大市場たるを得ると雖も、河口に砂泥充塞して海に通する難く、纏かに輕舸に因て洋上の船舶と往來するを得るのみ、其七尾、敦賀宮津、境等は良港の形をなすと雖も、その掌握する產出地は甚だ狹隘なるものにして大船を寄するの要甚だ勘なし、加ふるに西北時候風の強荒なる、航海は半歲殆んど杜絶し、舟楫の便甚だ佳からず、其東海の灣深くして風和なるに比すれば彼の優是の劣實に同日の諱にあらざるなり、余輩は云へり日本は東に面し、西に背すと、即ち東に開て西に閉づ、即ち歐洲の正反對なり。

然れども西南の一隅は全く此規定に反するが如し、九州の地勢は西に開て東に閉づ、猿猴身を鞠めて夕陽に向て坐するの状なり、其東面日向灘に濱する所は港湾出入の欠乏本洲の西海岸に於けるが如し、其細島と油津とは僅かに小船の碇泊を許すのみ、上て豊後豊前に至るも東にして大港の開くあるなし、然るに西海岸に至ては全く然らず、「日本地文學」の著者矢津氏は記せり、「肥前ニ至リテ殆ド屈曲ノ状態ヲ盡セリ、或ハ岬嘴長ク出テ、或ハ港湾深ク入り、西ニ向テハ東西松浦ノ二半島突出シテ伊万里灣ヲ抱キ、彼杵ノ半島ハ鯛浦ヲ擁シ、東ニ向テ島原半島トナリテ築紫瀬ヲ包ミ、終ニ宇土ノ一角ヲナシテ薩摩大隅ノ二大角ヲ出シ薩摩灣ヲ抱ケリ」と、而して此屈折中良港好埠一にして足らず、其佐世保は海水深くして巨艦を泊し得べく、其長崎は陸運に不便なるも世界最良港の一を以て算せらる、其三角は東肥沃野の產出物を悉く掌握するに足る、東岸の貧、西岸の富、亦同日の譚にあらざるなり。

本州の南西部も亦此西向の傾きあり、其大坂灣の西向して開放する、其「日本の地中海」なる「内海」が我のシブランタルなる門司海峽より東に向て延び、星列碁布の島嶼の間を屈折して深く芽渟海迄浸入する等、一として西向の徵候にあらざるはなし。

全國西南と東南に開け西北に閉づ、天女は前と斐とに注意して背を顧みず。

日本國の山系亦余輩の熟考を要す、そは海岸線は他邦との關係を審かにし、山脉の、方向、情質は内治の如何を明かにし、兩者に依て國民が世界に盡すべき天職の如何を判決し得ればなり。

余輩は復た爰に「日本地文學」記者の言を借るの必要を感ずるなり、彼は日本山系の大略を記して曰く

蓋シ我が帝國邦土相異レル方向ヲ探ルニ脉ノ大山系ヨリ成レリ
 (一) 樺太系ト云フ即チ東北方ナル樺太島ヨリ地脈ヲ延キ宗谷峠
 ヲ渡リテ蝦夷島トナリ其ノ中央ヲ南々東ニ貫通シ襟裳岬ニ出テ
 遂ニ脈ヲ中土ニ列テ少シク方位ヲ轉シ南々西ノ進路ヲ以テ太平洋
 ヲ走リ中土東岸ニ於テ少シク背ヲ露ハシ本系ノ内部ニ駢趨ス
 ル火山脈ト共ニ信濃ノ境上ニ達セリ(二) 支那山系ト稱ス即チ西
 南支那大陸ノ餘波ニシテ火山脈ハ琉球島ヨリ九州ニ進入シ露島
 火山脈トナリ古生紀山脈ノ軸線ハ肥後ノ海濱ヨリ同島ヲ東北ニ
 橫過シ豊後ニ出テ遂ニ四國島ニ渡リ判明ナル該島ノ軸線トナリ
 阿波ノ東部ニ於テ少シク缺損シ再ビ紀伊半島ニ起リ大和ヲ横通
 シテ三遠兩國ノ間ニ入り遂ニ信濃ニ達ス支那山系ノ一派ハ中國
 中央ヲ地形ノ如ク連亘シテ其軸線トナリ大湖ノ北邊ヲ過ギテ飛

彈ノ境上ニ進入ス此兩派ノ峽谷ハ即チ所謂瀬戸内海ニシテ火山
 脈ハ此ノ溝間ヲ逸過セリ

樺太及ビ支那ノ兩大山系ハ信濃及ビ飛驒ノ境上ニ於テ互ニ相衝
 突シ地皮ニ一大裂溝ヲ生セリ且ツ此ノ兩大山系ノ内部ニ沿フテ
 駢趨シタル數流ノ火山脈モ又爰ニ集リ地皮衝突ノ接合スル縫裂
 線ノ弱點ヲ求メテ其ノ勢ヲ逞フシ劇烈ナル噴起作用ヲ以テ遂ニ
 高峻ナル諸嶮峯ヲ築クリ此ヨリ火山脈ハ一轉シテ南々東ノ方向
 ヲ以テ縫裂内ヲ横走シ甲斐駿河伊豆ニ亘リ遂ニ富士帶ト稱スル
 一大派ヲナシテ太平洋中ニ突出シ伊豆七島ヲ噴起セリ以上ハ本
 邦ヲ組成スル大山系ノ大勢ナリトス

樺太山系并びに支那山系は稍や平行脈にして、唯僅かに少しく駢趨の
 方向を異なるのみ、故に日本の山脉は重にブロエー氏第一則に因る

ものと謂はざるを得ず、即ち山脉は邦土の延長に従て連亘し、南より北にするの方向を取れり、然れども二系相接合する所に高嶺亘岳相聯りて邦土の延長を横断するあり、其最も著名なるものは富士山帶にして遠く太平洋中に起り、青島八丈となりて海上に顯はれ、伊豆七島となり、天城山となりて伊豆半島の骨子を作り、函嶺となりて本島の南北脈に接し、竟に二脉相衝突する點に於て富士山となり一千二百丈の天外に聳ゆ、尙西北して淺間岳を生み、曰隱妙高山となりて日本海に聳く、是れ實に本邦の最高地にして全國は此處に於て東北部と西南部とに兩分さる。

富士山帶と駢趨する山脉亦一にして足らず、飛濃山脉の信濃に起り越後越中の間に於て海に盡きるあり、又伊勢山脉とも稱すべきものありて、紀伊の南端潮崎に起り、北に亘りて伊勢の西境を作り、關ヶ原の一

道を残して伊吹岳横山岳となり、濃江越の境に於て支那山系に合し、加賀の白山に抵りて再び西北の方向を取り、栗加羅峰となりて能登半島に延び、珠洲岬に於て日本海に終る、其他岩代と羽後とを分つて一脉あり、東南に延て奥野の間に隆起する處は有名なる白川にして、奥羽七國の關門なり、兩羽間に院内の東西小脉あり、羽後陸奥間に錠ヶ關の起伏あり。其他全國臻る處南北の延長脉を截断するに幾多の東西脉あらざるはなし。

然れども本邦の地勢より論ずる時は南北するは幹にして東西するは枝なり、櫛太支那の兩山系は梯の縱木にして伊勢、飛濃、富士等の東西脉は階なり、南北するは東西するよりも易し、然れども幾多の障害なくして南北する能はざるなり。

故に日本國の地勢は伊太利、スカンダナビヤの如くブーニー氏第一則

に因るなれども之れに加ふるに希臘瑞西の如く東西脈のあるありて又第二則に因るものなり以て一統和合するを得べし。以て一統の下に分離自治を計るを得べし。

今日本國を他の文明國に比せんか、余は先づ之を英國と比較せざるを得ず、英國の稍や東方「北海」に向て閉ぢ西方大西洋に向て開くは我の西方日本海に向て閉ぢ東方太平洋に向て開くが如し、而して其東西方に於てテームス吐口シンク諸港(Cinque Ports.)ヨーツマス、サウザムブトン等に於て歐大陸を迎ふるの狀は我の西南諸港が西開して亞細亞大陸に向ふが如し、其山脈に南北するものと東西するものとあるは大に我の山系と相均し、日本を稱して東洋の英國と云ふ、其大陸に對する位置も、其大洋に面する狀も、山脈の方向に於けるも二者の類似は甚だ多し。余は亦日本を希臘半島に比せんと欲す、希臘の東面して亞細亞に對す

るは我の西南地方が西向して同大陸に對するが如し、其多島海に散布する百餘の島嶼は我西海の諸島が我と大陸との間に羅列するか如し、其ベロボネサスは我の四國九州ならんか、其コリント灣とエーゲヤ灣は我の内海と大坂灣ならんか、然らばピラスを神戸とし雅典を京都とせよ、我の琵琶湖に對するに彼のビシャの窪地とコバイス湖あり、我的函嶺に對するにオスリス(Othrys)山あり、テサリーの野は關東の平野なり、馬塞頓の原は奥羽の曠原なり、特に西岸アドリヤ海に濱する邊は港灣屈折甚だ妙なく、羅馬歴史家モムセン氏の「伊太利はアドリヤ海岸に於て希臘と脊合をなせり」との言の能く意を盡せるを見るなり、希臘が歐洲本土に開く所は其西南にあつて西北にあらず、我の日本海に閉ぢて支那海に開くに比較せよ。

希臘の山脈に又南北するものと東西するものとの二様あり、前者は大

陸山系にしてアルプス山の一支が南向して爰に至りしものなり、恰も我的支那脈が喜馬拉亞脈の餘波として東北するが如し、又本脈を横断するに副脈あり、全國を分ちて數箇の地方となす、恰も我的東西脈が邦内各地の封建自治を促すが如し。日本は亞細亞の希臘なり、共に大陸の東陲に起て東門の關を守るが如し。

余は又更に日本を歐羅巴大陸に比せんと欲す、余は已に之を希臘に比せり、而して希臘は小歐羅巴なり、日本亦小歐羅巴ならざるを得んや。歐の地勢の東北より西南に走るは我と異なる事なし、若し本洲のみを以て歐大陸に比べんか、比較益々相近きを見ん、彼の地中海は我の「内海」なり、彼のイベリヤ半島は我の山陰山陽なり、彼の温暖なる伊太利半島の橄欖樹を以て掩はるゝは我の南海の紀伊半島の蜜柑樹を以て馥郁たるが如し、アドリア海を伊勢海とせよ、而して尙ほ想像力の自由を許

すなれば衣ヶ浦以東伊豆半島迄をペルカン半島と思ひ見よ、歐大陸南方の三半島は我に比較物の供すべきあり、我の西北海岸亦然り、不列顛群島を表せんが爲めに我に隱岐群島あり、丁抹半島の日耳曼海に突出するに對して我に能登半島の日本海に突出するあり、獨逸北岸の平潟千里に亘るに對し我に北越の砂岸百里に亘るあり、東北の露士亞平原は我の奥羽北海の郊野なり、スタンダナビヤ半島を表せんが爲め我に佐渡島あり、竹島の孤島は隱岐の西北日本海中にありて、英の西北大西洋中の孤島アイスランドを想ひ起さしむ、外形上の二者の類似は實に緻密なるものと云ふべし。

余は已に歐大陸の山系を論ぜり、而して今彼と我との比較を山脉の方に向に於て取らんとするも亦決して難きにはあらざれども冗長を免がれん爲めに之を讀者の考察に任せん、余輩の已に注意せし如く我國は

南北東西の山脈を以て現然たる郷域に區分せらるゝあり、而して之れ又歐大陸の地勢たるは余輩の已に攻究せし處なり、余輩をして再び想像力の翼を借り、歐洲を我蜻蜒洲面に畫かしめよ、歐の諸強國を我の本土に割布する亦難きにあらざるべし。

我本洲の西南日本海と内海との間に伸る長半島は冷血なる長州人の住居する我の西班牙なり、東隣の幾内は久しく我國文明の中興たりし我の佛蘭西なり、紀伊半島は我の伊太利として南海に突出し、尾濃の沃原の其東北に附着するは恰かもボリ沿岸の郊原がアベニン山の東北に横たはるが如し、半島の北境、琵琶淡水が八景を呈する邊はレマン湖を有する瑞西ならん、アルプス山の重嶺巨峯蜿蜒として東に亘るに比して濃飛信の重巒が鬱然として國の中部に蟠かまるあり、其南支して遠駿豆となりて海に終る所は我のベルカン半島なり、關東の野、利根の

水域は洪葛利の沃野ダニエーブの水域せん、北海の能登を我の丁抹となし、之より平潟百里東北に向つて弓形をなして海に臨む我の北越は實に獨逸聯邦の位置にあり、是より東北廣袤の地、文化を蒙る最も遲かりし我の奥羽北海の地はムスコビヤの全土たる露士亞の位置に立つに非ずや、休言よ、余輩の比較は想像力の濫用より來ると、余輩我國を亞米加に比せんとするも能はざるなり、亞非利加なり、潔斯利亞なり、印度なり、支那なり、余輩は比較を求めんと欲して能はざるなり、日本國の位置は亞細亞的なるども其構造は歐羅巴的なり。

已に其位置を知り、其構造を究めたり、リヒテル、ギヨーの迹を蹟みて謹慎静肅に地理學上の事實を歴史的に解せんには余輩亦我邦の宇宙に對する天職を探り得ざらんや、已に先例の供せられしあり、余輩の解題は必づしも情者の夢想とは信せざるなり。

Cyprus.

Candia.

一、日本は島國なり而して島國の用は常に大陸間の交渉を助くるにあり。英國が歐米の間にあつて歐の粹を以て米を開き、米の富を以て歐を利すとは余輩の已に論ぜし所なり。シ、リ、リが地中海の中間にありて歐非兩大陸の思想交換の地たりしあり、地中海東隅の一島シブラスは亞、歐、非三大陸の間に介し、一方にはフイニシャベビロンの文明を吸收し、一方より埃及の文物を探取し、之に住するに重に希臘人を以てしたれば、古代三代文明の混同は此一小島に於て行はれ、文化西漸して歐大陸に達せしは多くは此島と其西隣なるカンチャヤ島を通過してなりと云ふ。日本國の位置は米、亞の間にあり、其天職は是等兩大陸を太平洋上に於て鍵鎖するにあらずして何ぞや。

二、日本國の港灣に米に向つて東開するものと支那本洲に向て西開

するもの多きは米、亞間の媒介者たる我の位置を確定するものなり、見よ我の室蘭、松島、横濱、四日市等の東向して旭日に向ふに對して、米のベンクーベ、タコマ、ポートラン、桑港、サンダーラゴ、サンブルノス、アカブルコ等が西向夕陽に對して我に應ずるを、我の神戸、馬關、長崎、三角が西に向ひて我が西隣を迎ふるに對して、黄河、揚子江は我に向て流れ、其天津、上海、漢口、福建は悉く我に向て開き我の招待に應ぜんとするの狀を、我は一手を伸して米を迎へ、他手を伸して、亞を招き二者をして我に於て合一ならしめんとするが如し、恰も英が西向しては米に向て開き、其グラスゴー、リバプール、ブリストル、ク隽ンスタウン等が米のボストン、紐育、ヒラデルヒヤ、ボルチモール等と相對し、東向してはハル、倫敦、ボツマス等を以て歐大陸の西北諸港を受るが如し、我の亞と米とに對する位置は英の歐

と米とに對する位置ならざるを得んや。

二百一

三、我が山脈軸線の南北するは我國に亞細亞的統一を施すに難からざらしめ、亦之を横断するに東西脈の所々に存するは統一の下に歐羅巴的の自治獨立の精神を養生し得せしむ、即ち我に亞歐兩主義を同化するの特質ありと謂つべし。

日本國の天職如何、地理學は答へて曰く、彼女は東西兩洋間の媒介者なりと勿言、何ぞ簡短の甚だしきやと、是れ一大國民たるに恥づべからざる天職なればなり、是れ希臘國の天職たりしなり、是れ英國の天職にして彼女の強大なるは彼女が能く其天職を盡せしが故なり、媒介者の位置……和平を求むるもののは福なり、其人は神の子と稱へらるべければなり。

地理學の指定に係る我國の天職は大和民族二千年間の歴史が不覺の

中に徐々として盡しつゝありし天職ならずや。

支那文明の中真は黃河の沿岸なりし、而して其渤海は我に向て開け、其僚東を經て高麗半島は我に向て伸び、我の對島、壹岐、五島は其地勢を受けて我の九州に及ぶ、而して支那文明は此地理學上の通路を経過して斷へず我に來入せり、我は悉く之を受け、能く取捨選擇し、之に加ふるに非常の進歩と改良とを以てせり、制度、文物、美術、工藝、耕耘の法に至る迄創意は我は悉く之を支那に受けたり、而して神武大帝一統以來、大和武、田村麿の東征、仲哀、神后的西征に至る迄、荒陬の地未だ道路の便甚だ乏しきの時、能く短日月の中に東征西服して全土を一中央權の手に握るを得せしめし者は、日本の地勢がブーエー氏第二則に依り、軸脈國の延長に從て連亘し、彼等の遠征に防害を與へざりしが故なり、故に應神の世に始めて支那的統一主義の我邦に輸入されしや、國民は喜んで之に

接し爾來各王朝が制度改革に從事せし時必ず西隣の制度に則り、我蜻蜓洲に家族主義に基みする支那政略を施すに敢て一も不便を感じざりしなり、加之支那の大陸的思想は日本に渡て島國的の壓搾、蒸粹を來し、忠孝仁義の常道は殆んど宗教的の教理と化し、竟に世界に供するに萬世一系の天子を以てするに至れり、強國の間に介し、重巒高嶺一國を十八郷に分断する瑞西國に於て、我の制度を施さんとするも全く能はざるなり。

我等の吸收せしは勿論支那のみにあらず、西藏蒙古を經て黄河沿岸に輸送されし印度思想も直に地理學上の常路を經て我に輸入せられたり、而して佛法一び我邦に入りしや釋迦牟尼佛は幾くもなくして一大帝國を彼の領土に加へたり、日本に於ける佛法の發達は實に之を輸入せし人の預想外に出たり、佛法學者は云ふ若し釋氏をして彼の死後三

千年の日本佛法に接せしめしならば彼はその彼の宗教なるを判別し能はざるべしと、印度本國に於ては殆んど消滅し、西藏蒙古に於ては拉馬教となりて法主制度の迷信に下落し、支那朝鮮に於ては儒教政治の下に僅かに下民の信崇を仰ぐに止まる佛教は、我日本に於ては直に王室の宗教となり、我の寶貨と美術と智能とは悉く其使用に供せられ、今や佛教國民中我の如く普く釋氏の感化力に與かり、能く彼の眞理を解するものは地球上なきに至れり、
嘉永六年六月北米合衆國の一艦隊が我の浦賀に來り、威嚴と禮節とを以て我に開港を促がせし時は東西兩洋間の媒介者が強健有希望なる新郎に接せし時なり、米の我と交通を求むるに至りしは實に止を得ざるに出たり、之に先ずる七年西洋文明は已にロツキ山脈を横斷し、太平洋岸に下り、カリボルニヤに樂園郷を作り始めぬ、之に先ずる十年攝理

は砲聲を以て我が西隣の惰眠を破り、彼等に堯舜の美德を世界に發揚せしむるの時機を供せり、カリホルニヤ開け、支那開放されて其中間に立つ日本にして永く東手干涉せざるを得んや新郎新婦已に丁年に達せり。媒介者の立つべき時は至りぬ。

提督ベルリ開港要求の理由は米國の漁船にして薪水の欠乏を告ぐる時は我の之を供せん事にありたり、然れども彼をして爰に至らしめしは米國支那間に航路を開かんが爲めには日本の開放を必要と認めたればなり、日本の位置たる太平洋航路の衝に當り、支那の富港より桑港、ポートランド、ブゼット淺瀬諸港に往復せんとする船舶は我國に寄港せざるを得ず、殊に黑潮の我の海岸を沿ふ數十里の沖に流るゝあり、西南反對貿易風帶の我を去る遠からざる處に始まるあり、我に寄らずして東西兩洋間に航海せんとするものは海流と氣流との援助を抛棄す

るものなり。

必要に迫られて日本は開放せられたり、而して自然是世界の創造の時より此開放を待ちつゝありたり、東京灣の深く陸地に浸入し、關東の郊野を控へ、横須賀、横濱の要港を具へて東の方米國に向て開くは永く彼が來て我を開かこんとを待ちつゝありしなり、長崎、兵庫、堺は支那、印度に對する我の關門として己に開放せらるゝ茲に千餘年、然るに今や我の東門は開かれたり、東隣との交際之より繁く、萬邦の賓客、我は多くは之を東門に迎ふるに至れり。

米國一度刺を通じて我に親交を求め、我之を諾して彼と握手せしや、彼の文物は最速度を以て我に浸入し來りぬ、已に支那印度を學び盡せし日本は彼女の性來の同化力を以て歐米を吸收し始めぬ、而して東洋主義に堪へ、又之に依て涵養されし日本人は亦能く西洋主義に堪へ、能く

之を消化し、其東洋的の腦裡に蓄ふるに西洋的の思想と精神とを以てせり、西隣未だ一尺の鉄路を有せざりし時に我に已に千有餘哩の鋼鐵路の文明を我の僻陬に輸入するあり、清廷未だ暦を太陰の運行に求め、運を宿星の出没にトするに、我はニユートン、ラプラスの天文學に基ける太陽暦を以てするあり、卅年間にして日本は東洋國ならざるに至れり、而て四千年の昔、詩聖ホーメルの時代に於て、早や已にアリヤン人種の腦裡に浮び、アムファイクチオニック會議 (Amphyictionic Council) となり、「ツリビューン政治となり、マグナカルタを生み、英國清黨 (ピューリッジ) を出し、米國獨立となり、佛國革命となりし個人主義は西洋文物と共に我の認むる處となり、西隣未だ自由の一聲をも揚げざるに、釋迦の印度は奴隸國の耻辱に沈み、孔子の支那は瀟州掠奪者の占領物たるに際し、亞細亞の日本に、已に歐米的の憲法ありて、自由は忠君愛國と共に併立し得べし」と。

證例を世界に擧げぬ。

日本をして米亞の文明に接せしめし者は勿論其地理學上の位置に依れり、之をして亞細亞的の統一に堪へしめし者は其軸脈の南北して一國の統御を易からしめしが故なり、而して西洋主義の輸入に會して直に之に應するに至らしめしものは東西の横斷脈ありて統一の下にありて已に自治割據の制に馴致せしが故なり、東洋的の君主主義も我に施し得べし、西洋的の自由制度も我は施行し得べし、我の制度は西洋に則れり、西隣若し西洋を學ばんと欲するか、必らず我より之を學ばん、東隣若し東洋の長を取らんとするか、必ず我に於て之を認めん、兩洋我に於て合す、ハミール高原の東西に於て正反対の方角に向ひ分離流出せし兩文明は大平洋中に於て相會し、二者の配合に因りて胚胎せし新文明は我より出て再び東西兩洋に普からんとす。

さし出る朝日の本の光より

高麗もろこしも春をしるるん

二百十

平賀源内

第十章

南三大陸

赤道以南に地を有する三大陸を云ふ、亞非利加、南亞米利加、濠斯太拉利亞是なり、共に北三大陸の延長なるは陸地の連續を以て察し得べく、其地勢の北より南に亘るを以て知るを得べし、南三大陸は北三大陸の附屬物と見て可なり。

南三大陸は各々之を隔絶するに渺茫たる大洋を以てするに關せず其形狀並に構造に於ては相類似する點一にして足らず、今其重なるもの二三を左に掲げんに、

- 一、海岸線の圓滑にして屈折出入甚だ歎なき事、
- 二、地勢南北に亘り、北に廣く、南に狭く、山脉は陸の延長に徇ひ、東西

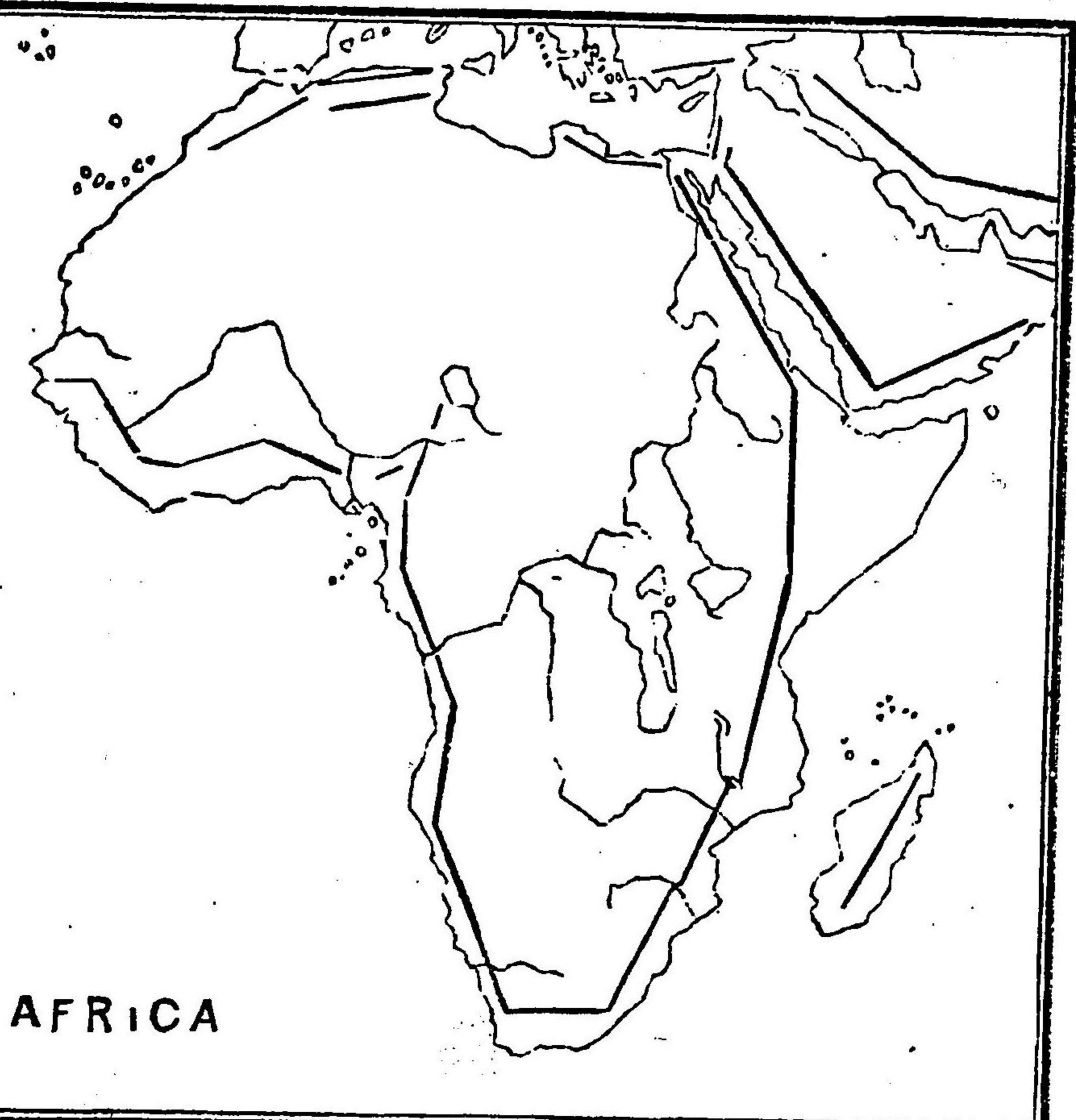
海岸に沿ふて聳ゆる事。

三、西南に大曲灣を具へ、東北に大岬となりて突出する事、

然れども各大陸亦其特質あるあり、非は高地大陸と稱すべく、平野は僅かに海岸に沿ひて存するのみ、南米は平原大陸と稱すべく、峻嶺東西兩岸に近く聳へて急斜傾を以て海に臨む濱の高地は高からず、山嶺亦險ならず、内地は重にも沙漠なれば之を沙漠大陸と稱せんか、非は北に寄る最も甚だしく、面積の過半は赤道以北にあり、南米之に次ぎ、濱は全く南半球に有り、故に南三大陸中非は最も早く歐亞の文化を受け、南米之に次ぎ、濱は大陸中の末子として世に現はれたり。

南三大陸が人類の進歩歴史に於ける位置如何、是れ讀者の請求する問題なるべし、然れども之れ未來に屬する問題なるを以て余輩は多言せざるを可とす、余輩は之を過去に徵し、北大陸の歴史に鑑み、以て僅かに

第六圖



余聲の憶測を試みるのみ。

亞非利加

亞非利加の地理は甚だ簡単なるものなり、觸體形をなしたる陸塊、之を繞囲するに平地の條片あるあり、内に向て進むこと平均百英哩にして山脈の海岸平地を沿ふて亦大陸を週廻するあり、山脈を経過すれば一面の高地なり、是れ亞非利加なり、地形構造の簡単なる是に勝る能はず。』非大陸の一大特質は其交通の不便にあり、港灣の欠乏、其一なり、一千二百萬方哩の大陸、一紐育一上海のあるなし、アレキサンドリヤ港は人工に成れる埃及一國の埠頭たるに過ぎず、ザンツベーなり、クボルメン、ナリ、ケーブタウンなり、新索たる小港以て大陸の輻輳地となすに足らず、大河の航海用に供する能はざる其二なり、ナイルは湖上五百哩間舟 own.

Niger.
Congo.
Zambezi.
S. I.

のア非利加地圖

楫の便を許すと雖も僅かに幅二十哩に足らざる兩岸の民を利するのみ、ナイシヤ、コンゴ、ザムベジの三大河に至ては急流河口より遠からざる處に存し、多く人工を施こすにあらざれば運輸の用をなさず、大陸を繞囲する山脈其三なり、大河の澗谷を以て海洋に向て開くが如きは非大陸に於て見ざる處、内地何れの方面よりするも先づ高嶺を越へされば海に達する能はず。海岸熱病地の一帶其四なり、歐人にして内地に入らんと欲するものは必らず此疫瀆地を通過せざるべからず、而して熱病の感染を受けざるもの未だ曾てあるなし。故に見るア非利加は自然の封鎖國なるを、入るに關門あるなく、出るに通路なく、加ふるに大陸を繞囲するに山脈の高壁を以てし、外濠として惡瀆地の一帶を設けたり。』此四圍僻陬の大陸、土地沃饒と稱す可らず、北にサハラ、南にカラハリありて大陸の三分一は荒漠たる沙原なり、中部高臺の地、日光の直線を受

くると雖も、植生豊かならず、害蟲最も多く、印度、巴拉西爾等の樹林蘿藤彌蔓の狀は此大陸に於て多く見る能はざる處なり、ア非利加内地を開放するも文明國は之に依て利する處有や否やは未だ識者間の問題なり、我の彼に給すべきものは多くして彼の我に酬ゆべきものは砂金と象牙とを除ては他に殆んどあるなし、野獸は文明の進歩と共に盡滅するもの、寶金属の量は人命を賭して求むるに足るや未だ疑問に存す、今や歐洲の諸大國は争て地を非大陸に求めつゝあり、然れども彼等は占領權を宣告せしのみにして未だ實際の植拓に從事せしにあらず、英人がシヤリタングニカ地方に開拓を試みつゝあると、白耳義人がコンゴ河沿岸の開放を勧めつゝあるとを除いては他に未だ此暗黒大陸を變じて人類の幸福なる棲息地となしつゝあるの經營を見ず。

然らばア非利加は開放せられざるか、天は之を抛棄せんが爲めにア非

利加を造りしか、亞非利加は人類進歩歴史に與かるべからざるか、一千二百萬方哩の陸塊は永遠迄黒奴と野獸との占領地として存するか、余輩は若か信する能はざるなり。

非大陸の墾闢は人類全軸の進歩が其頂度に達せし後にあり、其交通の不便は之を超除するに今日の工學を以て爲す能ず、或は單一線鐵路を架設すべしと云ひ、或は新たに吃水七時の川蒸漁船を造るべしと云ひ、或はサハラの沙漠を變じて海となさんと云ひ、亞非利加内地開墾法の難きは北極に到達せんとする同一なり、今日の學術と資本とは未だ此難に勝つ能はず、ピーテルス氏の剛膽なるもスタンレー氏の智略あるも、未だ此障害を超ゆるの道を教へず。

余輩は已に亞非利加内地の比較的沃饒ならざるを述たり、印度南米の富は招かずして開明人の垂涎する處となり、利慾は之を開拓するに充

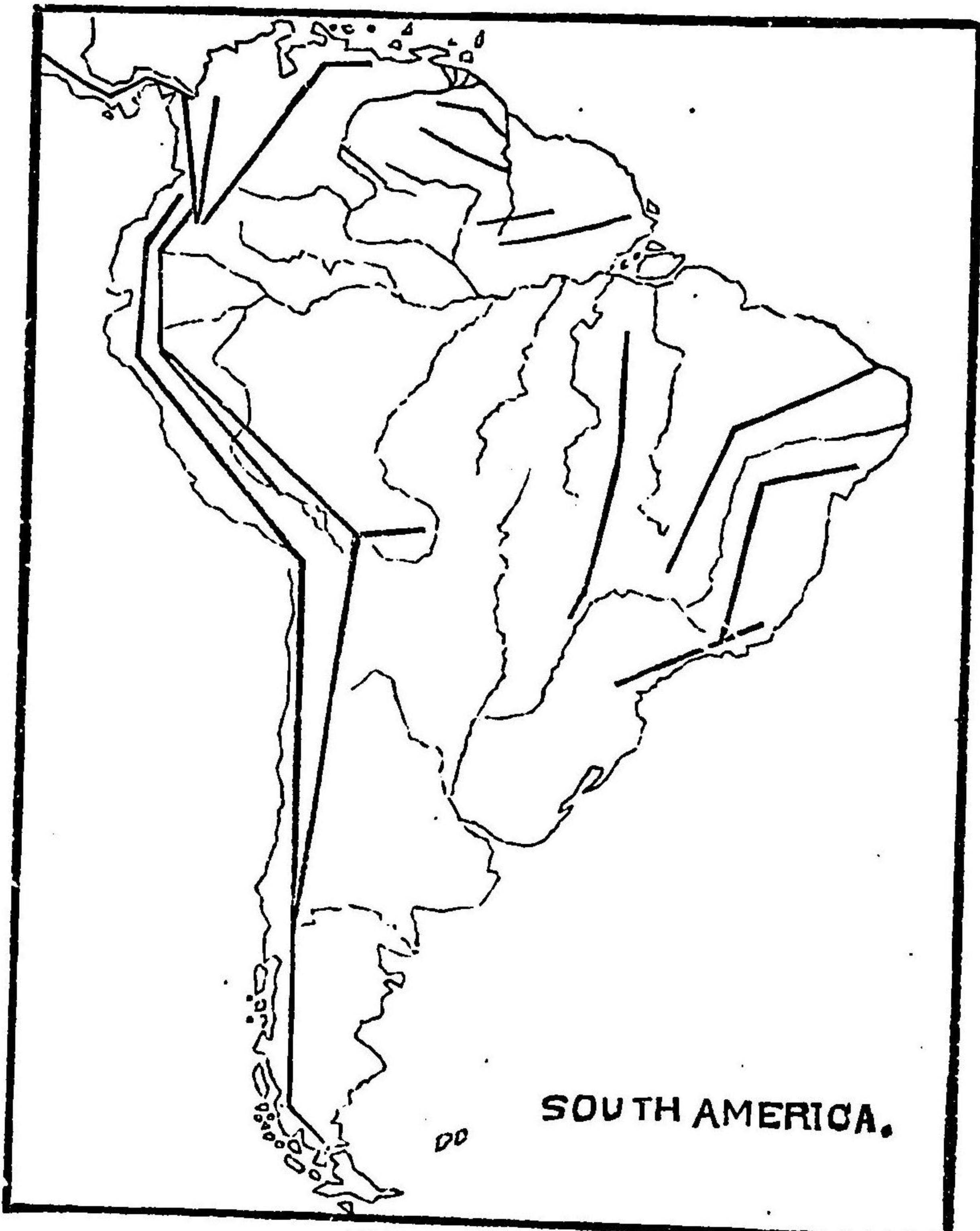
分なる主動力なり、然れども亞非利加は全く然らず、象牙已に盡き、買奴の蠻習禁壓せらるゝに至らば、疫瀆を侵し、威焰を忍び、毒蛇猛獸の險をすものは殆んどなきに至らん、利慾が人類活動の最大主動力たる間は、亞非利加の開發は望む可らざるなり、葡萄牙人の其東西兩岸樞要の地を占有する事こゝに四百年、未だ曾て一路を開て便を内地に通せしことなし、伊太利人紅海の西岸アンクを占領し、幾干もなくして收支相償はざるの故を以て之を放棄せり、亞非利加は義狹心と慈善心とのみを以て開くを得べし、英の宣教師ロバート・モフハート氏此精神を以て一生を黒奴の中に消費し、南方諸州が今日の旺盛を致すに至りしは彼の功績與りて力あり、彼の女婿デビッド・リビングストン氏は中央亞非利加の開祖と稱すべき人なり、彼に敬天愛人的一片の精神ありしのみ、彼曾て人跡稀なる地を横断せんとするや、其險を説て彼を止むるものあり

彼答て曰く、葡萄牙人が利慾の爲めに通過し得る所、我何ぞ我が神の愛の爲めに通過し得ざらんや」と、彼の地理學的探検は常に博愛的目的を以てせり、彼常に曰く、「地理學探検の終る時は我が目的の始まる時なり」と、以て黒奴の教化は彼の最大目的たりしを知るに足る、彼は生命を亞非利加大陸の爲めに犠牲に供せり、スタンレーの探検は彼を搜索せんとするより起れり、シャーワ、タンガニカの傳道的植拓は彼の考案に徇て創まれり、コンゴ自由州は彼の博愛に則りて開明國民の同盟團結の上になれり、中央ア非利加をして今日あらしめしものは實に一宣教師の衷情に基けり、博愛之を開くを得べく、博愛之を拓するを得可し、非大陸の開發は博愛時代の到來を待て始めて期すべきなり。

故に余輩は云ふ、ア非利加大陸の存在の理由 (raison d'être) は人類の高尚なる自力を發揚せんが爲めなりと、技藝なり、博愛なり、之を適用するの

機會なくんば其發達は望む可らず、世に難事の存するは人の之に克ちて進歩せんが爲めなり、鍛練的の性を有する此地球は亦人類最上の進歩を促がすの場所ならざるを得んや、米人シオド・バークー氏督て宣教師シャツドソン氏の事業を評して曰く、「若し外國傳道事業にして一マヤツドソンを生ずるに止まるとするも吾人は以て足れりとすべし」と、一偉人を世に出すは國民の大事業なり、若しア非利加にして百モフハート百リビングストンを喚起せしめ、歐人之に依りて博愛の功力を悟り、弱を蠶食するの愚と害とを認め、彼等がコンゴ自由州を設立せし如く、劣等人種を遇するに人情と公義とを以てするに至らばア非利加は其天職を充たせりと謂つべきなり、非の歐に接近するや其開墾は歐人より望むべきなり、今や全大陸歐人の割分する所となれり、歐の共同は非より始まらざるべからず、埃及問題が公義正道に基て結了せられ、歐

人共同一致して闇黒大陸を開かんとすれば、ナイルの聖河は地中海文明を南輸するの通路となり、鐵路ニユヒヤの沙漠を横断し、カルツームの城市を過ぎ、ホワイト、ナイルの兩岸を縫ひ、竟に赤道直下の大湖に達し、淡水海の連鎖に接續し、以て東南岸ザムベタ河口に達するを得可し地中海岸アレキサンドリヤよりモザムビクル海岱クオルメークに至る迄自然の通路の存するあり、其開墾は未來の「歐羅巴合衆國」の一事業として存するなるべし、而して佛の植民地たるアルゼリヤは益々噴水井の堀鑿を増加し、サハラの大沙漠をして歩一步づゝ開明の域に加へつゝ進まば、竟に田園相續でナイシヤ河邊に達し、南向してカメローラ山下ギニヤ灣に至るを得ん、時に亞非利加全軸は歐大陸の田畠となり、黒人安堵して白人の爲に之を耕し、奴僕は卑陋なる事なく、主公は尊大なることなく、那威の北端北岬より、亞非利加の南端喜望峰まで、巍然た



圖七
第

る和氣の充ち満つるに至らむ、佛のピクトル、ヒューロ曰く「十九世紀に於て白人は黒人より人を作れり、二十世紀に於ては歐洲は亞非利加より世界を作らむ」と。

南亞米利加

南米は北米の連續たるは余輩の已に前章に於て論述せしが如し、兩者地勢の相似たる之を同大陸を二分せしものと見做も可なり、然るに前者は拉典人種の植拓移住せし處となりしより、後者の「チエーテン」的開明に比する時は歩數歩を譲らざるを得ず、ボリベー西班牙本國に叛して南米諸國の獨立を成就してより、以來自治制度に習練せざる拉典人種が北米合衆國の憲法に倣ひ、大陸の樞地に割居して共和國を設立せしと雖、サクソン民族の政治的機關は彼等の能く運用し得べきにあら

ざるを以て、南米の共和国なるものは僅かに虚名に止まり其實は壓制政治の最も甚だしきものと曰はざるを得ず、故に争亂紛擾止む時なく、君主政治の賤しむべきを知りて自治制度を實行するの資格なく、理想實力に勝るが故に暴力に依りて理想を實行せんと勉めつゝあるなり、爭鬪虛日なき南米諸共和国を如何せんとは歐米識者間の大問題なり、寶礦の無盡藏なるあり、珍樹奇木の森林方千里に亘るあり、世界最真最大の珈琲園、無比の大牧場、膏腴なる麥畠北はチリノコ河口より、南はボルーン岬に至る迄、正直なる勞働に依て仍ほ數千萬の人々に平安と快樂とを俱すべき富源は此大陸に存するなり、南米の欠乏は強固なる政治なり、如何にして之を供せんか、是れ目前の實際問題なり。

南米諸國今は將に破産の位置にあり、白露の如く其有名なる島嶼島と
乎に歐洲の有
君主國な
なさん乎

全國の鐵道線路とは舉て抵當として歐人の手にあるあり、亞善丁共和國の發達は重に英人の資本によりて成れり、其他ベチズ・エラなり、コロンビヤなり、其實權は歐洲資本家の掌中にあらざるはなし、故に或人は說をなして曰く、南米は早晚歐洲諸強國の有に歸す可しと。

又說をなすものあり曰く、拉典人種の性たる未だ自治共和の制に堪ゆるものにあらず、西班牙に共和政治の失敗なりし、共和國として佛蘭西の紛擾常に絶へざる、共に彼等が未だ此種の政治に適せざるの徵候ならずや、見よ巴拉西爾は帝國たりし時は南米諸邦中に屹立して最も強健なる政府を有せしかども、共和國となりてより争亂革命相踵で起り、今や國家累卵の危きに有にあらずや、穩和なる君主政治のみが南米の平安を維持し得べしと。

說をなすものは又曰く、南米を歐洲諸強國間に割分せん事は一には其
英米の保
護國な
さん乎

民の承諾せざる處なるべく、一には諸強國間に國力平均の度合を失ひ返て争亂を歐本國に釀すに至らん。若かず南米全土を擧てアングロ・サクソン民族の保護國となし、英國と北米合衆國とが其實に當り、南米今日の亂麻を調理すべし。

是等諸説何れも據る處なきにはあらずとも今日の實際的難問題を解せざるが如し、歐洲諸大國占領説は縱令南米人の肯んずる處となるとするも北米合衆國は厥の有名なるモンロー主義を取て歐洲政府が米大陸政治に干渉するを許さるべし、加ふるに一朝富饒なる南米諸洲の割附より歐洲諸強國間の權力權衡を擾亂するが如きあれば歐羅巴全土は再び「七年戦争」佛國革命時代の悲劇を呈するに至るべし、君主政治の回復亦望むべきにあらず、民の理想は北米合衆國にあり、已に大量なるドムセードロー帝を厭ひし民が如何で再び帝位に向て拜すべ

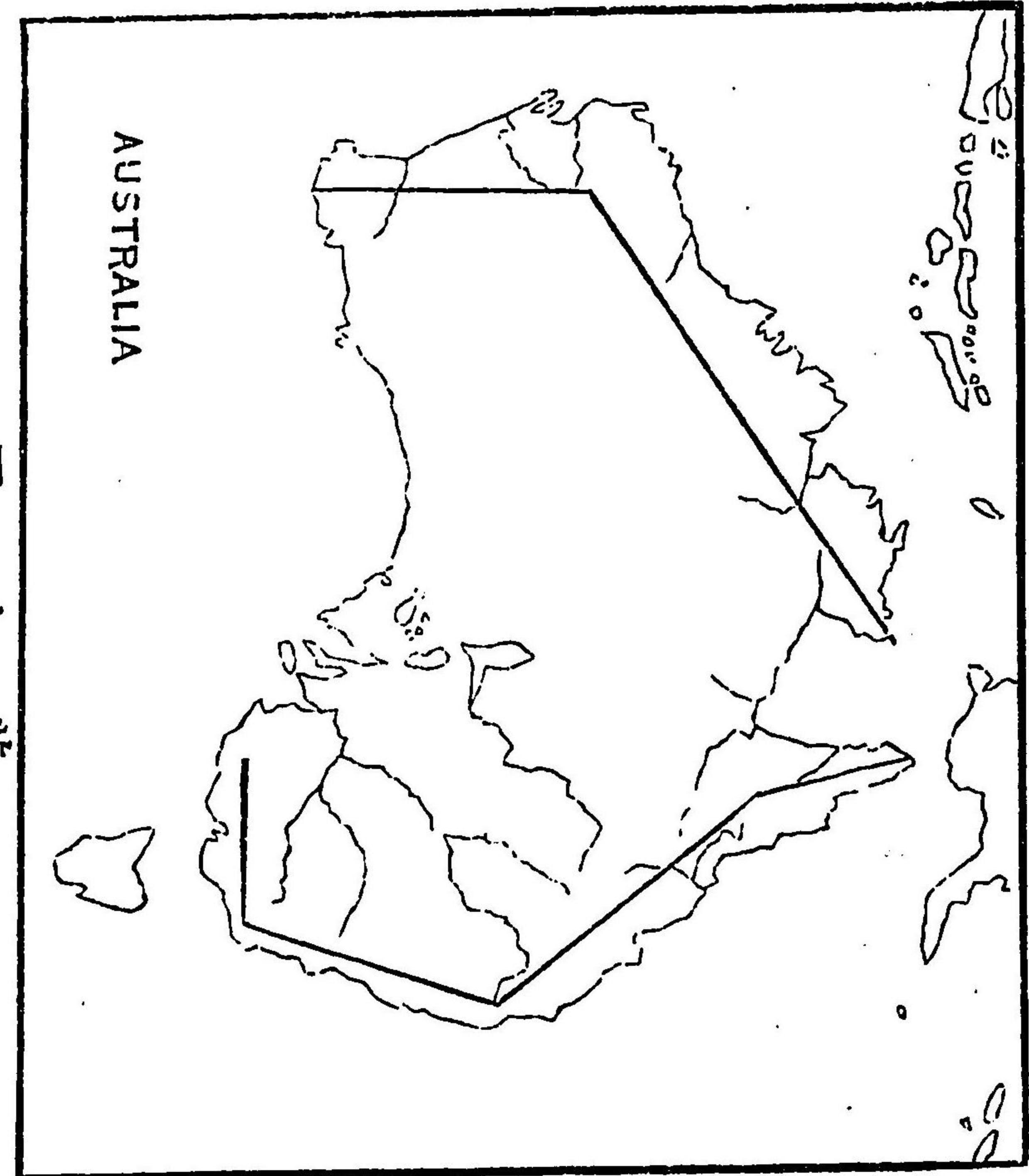
けんや、否、世界の陳腐政治は新大陸の堪めべきものにあらず。
第三説は稍實際に行はれ易きが如し、然れども之に勝るの一法、即はち自然の要求する惟一の方法が南米の未來として存するにあらずや、即ち北米合衆國を盟主となし、南北兩米一大共和國を創設するにあり、是れ米大陸地理の然らしむる處、是れ發見以來歴史の趣く處、是れ萬國舉て異議を呈する事能はざる處、是れ兩米大陸の利益全世界の幸福、是を除て他に此疑題を解するの途あるなし。

墨西哥並に南米諸共和国の憲法は皆北米合衆國の憲法に則りしものなり、合衆國は實に新大陸の中華なり、教化は彼より始まり、圍結は彼に依て成るべし、北方加拿大を合し、南方西印度諸島を買收し、墨西哥を誘ひ、中央亞米利加を同化し、終に南米六百萬方哩をして清黨祖先の理想に教化するは合衆國民の天職なり、北光閃く所より十字星直下に至

遠地勢の連續延長に徇ひ一大共和國の連亘するに至らされば南米問題は解せられざるべし。

濠斯太利

濠は亞の屬たるは非が歐の屬にして南米か北米の屬たるが如し、其海を隔てゝ亞大陸に對するは其獨立たるの證にあらず、余輩は已に東印度多島海の海深甚だ少きを述べたり、特に一鏈の島嶼兩大陸を繋ぐなり、亞は馬來半島となりて遠く南に伸び、蘇門特臘島と殆んど陸續きをなす、是より東西二千哩をサンダ諸島となす、濠の北端メルヒル島を距る二百哩の處に盡く、濠は地理學上亞の屬たるは爭ふべきにあらず。濠の未來如何、若し非と南米との各々其北大陸に於ける關係より推す時は濠は亞、特に東亞の附屬國たるの位置に居るが如し、然れども歴史



圖八 第

は全く地理學上の指示に反し、今や南洋の全躰は歐人の版圖として存す、然れども濠洲占領問題は已に終結せりと稱すべからず、東亞振興の後歐人永く南洋諸島に堪ゆるや否やは未だ以て知る可らず、東洋人の援助に依らずして彼等が南洋を開發し能はざるは明かなり、而して實力を重ずる支那人にして永く南洋の植拓に使役さるゝならば彼等は又其實權を握らずして止ざるべし、聞く英領香港の如きも其實際上の商權は已に支那人の掌中にありと、濠洲亦終に香港の如くならざるを得んや。南洋占領問題は支那の振興を待たずして容易に決すべからざるなり。

文明中央亞細亞に創まり、北半球を一週して三様となれり、歐羅巴文明なり、亞米利加文明なり、亞細亞文明なり、三者皆目的を共にして各其質

を異にす、人類全般の幸福は三者其特質を維持し益々之を發達するにあり、然れども文明は人類の生命力なれば常に增長するに非ざれば死滅するものなり、故に造化は三文明の爲めに擴張の地を供へたり、歐是非を同化し、北米は南米に伸び、亞は其理想を潔に施こし以て益々其特質を發揚し得べし、過去四百年間人類の冀望は常に西に存せり、而して今尚ほ西方の發達訓化すべきあり、然れども文明の西漸其極に達する時は其南漸の素まる時なり、南漸は已に索りぬ、未來一千年間人類の冀望は南にあるべし、而して西漸し終り、南漸し終り、人慾悉く去り、天理悉く存し、善と眞と美とが水の大洋を掩ふが如く、地球全土を掩ふに至り、此地創造の目的は達せられしなり、然れども吾人の義務は今の時にあす。に、此所にあり吾人にして今此の時と所に處して能く吾人の天職を盡されば最終の佳節は來たらざるなり、沈思萬國圖に對する時。

吾人をして神命の重きを感じしめよ。

版權所有

明治廿七年五月五日印刷
明治廿七年五月十五日發行
明治三十年二月廿五日再版

著者

内村鑑三



發行者

高田乙三

東京市京橋區出雲町一番地

福永文之助

東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

印刷者

高田乙三

東京市京橋區出雲町一番地

警醒社書店

東京市京橋區西紺屋町二十六七

印刷所

株式秀英舎

再求安錄

内村鑑三君著

定價三十錢
郵稅六錢

基督教信徒の慰全

版紀念論文 ユロムズ功績全

定價二十五錢
郵稅四錢

傳道の精神全

貞操美談 再教科及版獨習用

定價十五錢
郵稅四錢

路得記 婦と姑の福音全

英如何にして余は基督信徒とな
文りし哉

定價四十錢
郵稅二錢

新英語學

志賀重昂君序
内村達三郎君編

定價五十錢
郵稅六錢

陸軍中將川上操六君題

高田早苗君、那珂通世君、松村介石君序
酒巻鷗公著

定價四十錢
郵稅四錢

一千五百百年史

竹越與三郎先生著
定價一圓五十錢 郵稅二十錢

定價二十錢
郵稅四錢

司法大臣清浦董吾君題

前大審院長三好退藏君、小河滋二郎君、湖處子序
留岡幸助君著

定價二十錢
郵稅四錢

新感化事業の發達

(精密なる石版地)
内務省衛生局最後藤新平君序
京都看病婦學校教授フレーザー著
酒巻鷗公著

定價三十錢
郵稅六錢

食事

農商務大臣柳本武揚君題
定價二十五錢
郵稅四錢

定價十二錢
郵稅二錢

歐米五傑傳物語

渡瀬常吉君著
定價十五錢 郵稅四錢

定價十錢 郵稅二錢

日本國民ノ教育

前京都府知事渡辺千秋君題
篠田昌武君譯
定價十二錢
郵稅二錢

定價八錢 郵稅一錢

宗教良親王

高田早苗君、松村介石兩君序
戸川殘花君跋
定價二十五錢
郵稅四錢

定價十二錢
郵稅二錢

日本國民ノ教育

前京都府知事渡辺千秋君題
篠田昌武君譯
定價十五錢
郵稅四錢

定價八錢 郵稅一錢

歐米五傑傳物語

渡瀬常吉君著
定價十五錢
郵稅四錢

定價十錢 郵稅二錢

日本國民ノ教育

前京都府知事渡辺千秋君題
篠田昌武君譯
定價十二錢
郵稅二錢

定價八錢 郵稅一錢

● 版再求

安

錄

内村鑑三君著

郵定價三十錢
郵稅六錢

● 版三基督信徒の慰

全

郵定價二十五錢
郵稅四錢

● 傳道の精神

全

郵定價十五錢
郵稅四錢

● 美談路得記

媳と姑の福音

全

郵定價二十五錢
郵稅二錢

● 英如何にして余は基督信徒とな
文りし哉

全

郵定價四十錢
郵稅四錢

● 再教科及
版獨習用新英語學

志賀重昂君序

郵定價五十錢
郵稅六錢

○ 版二千五百百年史

竹越與三郎先生著
我國より幕府の衰亡に至る二千五百年間の史記

定價壹圓五十錢
郵稅二十錢

● 司法大臣清浦奎吾君題
内務省衛生局長後藤新平君序
陸軍中將川上操六君題
農商務大臣榎本武揚君題
高田早苗君、那珂通世君、松村介石君題
○ 被西亞侵略者

新感化事業の發達

定價二十錢
郵稅四錢

(精密なる石版地
圖、及密圖入)

定價三十錢
郵稅六錢

酒卷鷗公著

京都看病婦學校教授フレーザー著
京都看病學校教授成瀬四喜著

酒卷鷗公著

並定價上製五十錢
郵稅八錢

並製四十錢
郵稅六錢

英文各定價十錢
郵稅二錢

郵稅二錢

○ 食用看護法

酒卷鷗公著
定價二十五錢
郵稅四錢

(精密なる石版地
圖、及密圖入)

定價三十錢
郵稅六錢

酒卷鷗公著

京都看病婦學校教授フレーザー著
京都看病學校教授成瀬四喜著

酒卷鷗公著

並定價上製五十錢
郵稅八錢

並製四十錢
郵稅六錢

英文各定價十錢
郵稅二錢

郵稅二錢

○ 実用看護法

和文各定價十錢
郵稅二錢

郵稅二錢

酒卷鷗公著

並定價上製五十錢
郵稅八錢

並製四十錢
郵稅六錢

英文各定價十錢
郵稅二錢

郵稅二錢

郵稅二錢

○ 食事時

酒卷鷗公著
定價二十五錢
郵稅四錢

郵稅四錢

酒卷鷗公著

並定價上製五十錢
郵稅八錢

並製四十錢
郵稅六錢

英文各定價十錢
郵稅二錢

郵稅二錢

郵稅二錢

○ 日本国民ノ教育

渡瀬常吉君著
定價十五錢
郵稅四錢

郵稅四錢

酒卷鷗公著

並定價上製五十錢
郵稅八錢

並製四十錢
郵稅六錢

英文各定價十錢
郵稅二錢

郵稅二錢

郵稅二錢

○ 歐米五傑傳物語

定價十錢
郵稅二錢

郵稅二錢

酒卷鷗公著

並定價上製五十錢
郵稅八錢

並製四十錢
郵稅六錢

英文各定價十錢
郵稅二錢

郵稅二錢

郵稅二錢

○ 四版ワシントン

定價八錢
郵稅二錢

郵稅二錢

酒卷鷗公著

並定價上製五十錢
郵稅八錢

並製四十錢
郵稅六錢

英文各定價十錢
郵稅二錢

郵稅二錢

郵稅二錢

○ 前京都府知事渡邊千秋君題

篠田昌武君譯

定價十錢
郵稅二錢

郵稅二錢

酒卷鷗公著

並定價上製五十錢
郵稅八錢

並製四十錢
郵稅六錢

英文各定價十錢
郵稅二錢

郵稅二錢

郵稅二錢

○ 前京都府知事渡邊千秋君題

篠田昌武君譯

定價十錢
郵稅二錢

郵稅二錢

酒卷鷗公著

並定價上製五十錢
郵稅八錢

並製四十錢
郵稅六錢

英文各定價十錢
郵稅二錢

○立

志

松村介石君著 定價二十五錢 郵稅無料

○版八

アブラハム倫古龍

全著 定價二十錢 郵稅四錢

○版四

デビニチ

全著 定價十五錢 郵稅二錢

○版三

人學

全著 定價六錢 郵稅二錢

○版四

生ノ錦囊

全著 定價十錢 郵稅二錢

○版三

婦人のかゝみ

全著 定價二十五錢 郵稅四錢

○版再

婦人ノ物

全著 定價十錢 郵稅二錢

○版四

スクラッブ、ブック

(切抜貼) 上製著者クロト紙數二百ページ
用帖 縱一尺二寸横七寸五分

○通

信日記

(四六判) 發信用各定價十錢 郵稅四錢

○印

新島襄先生傳語

電、郵等諸通信の發着、時間、種類、
要領宿所姓名等を記載するに用ゆ
定價三十錢 郵稅六錢

○刊新

英社會改良家列傳會

大島正健譯

片山潛君著

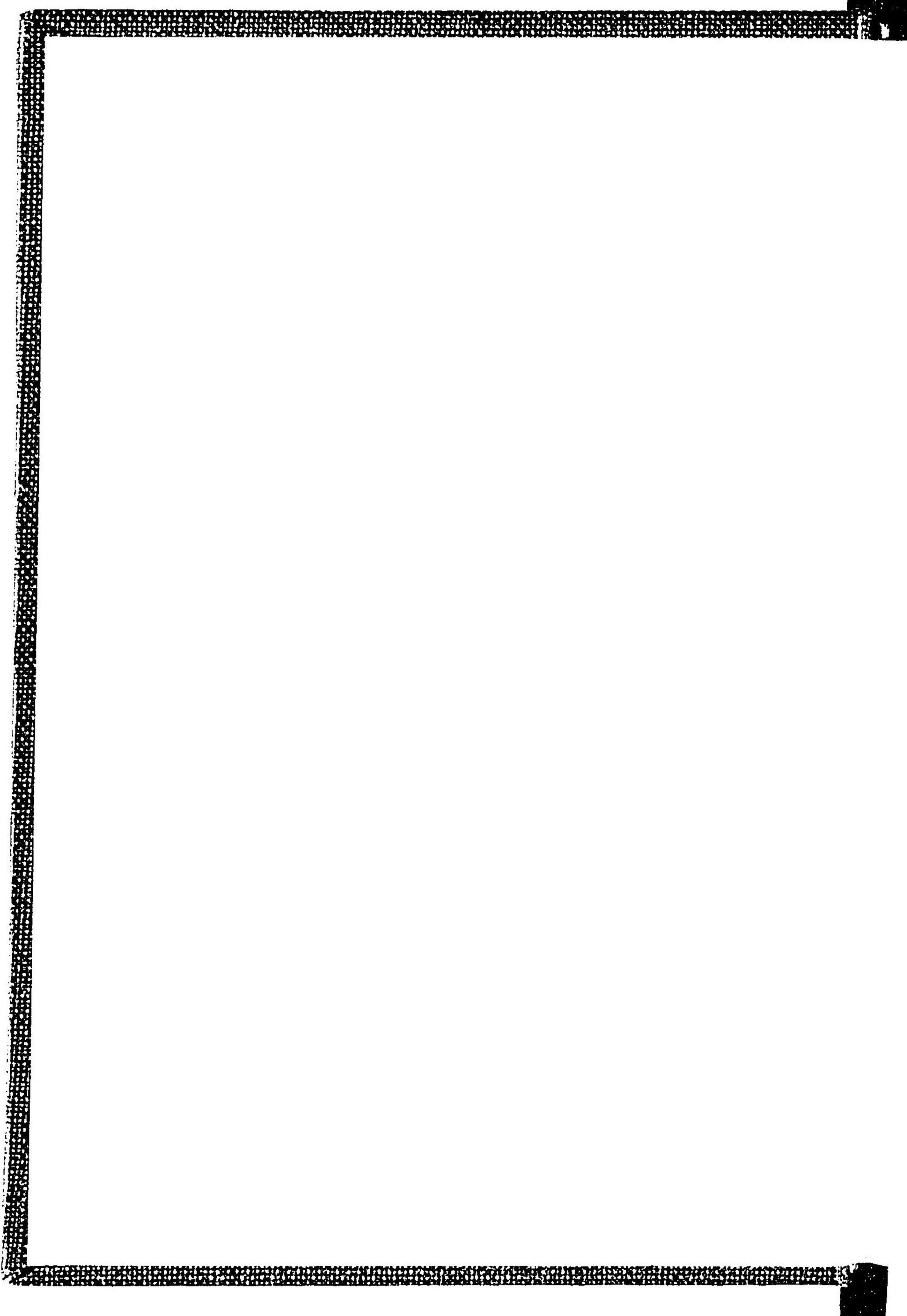
○刊新

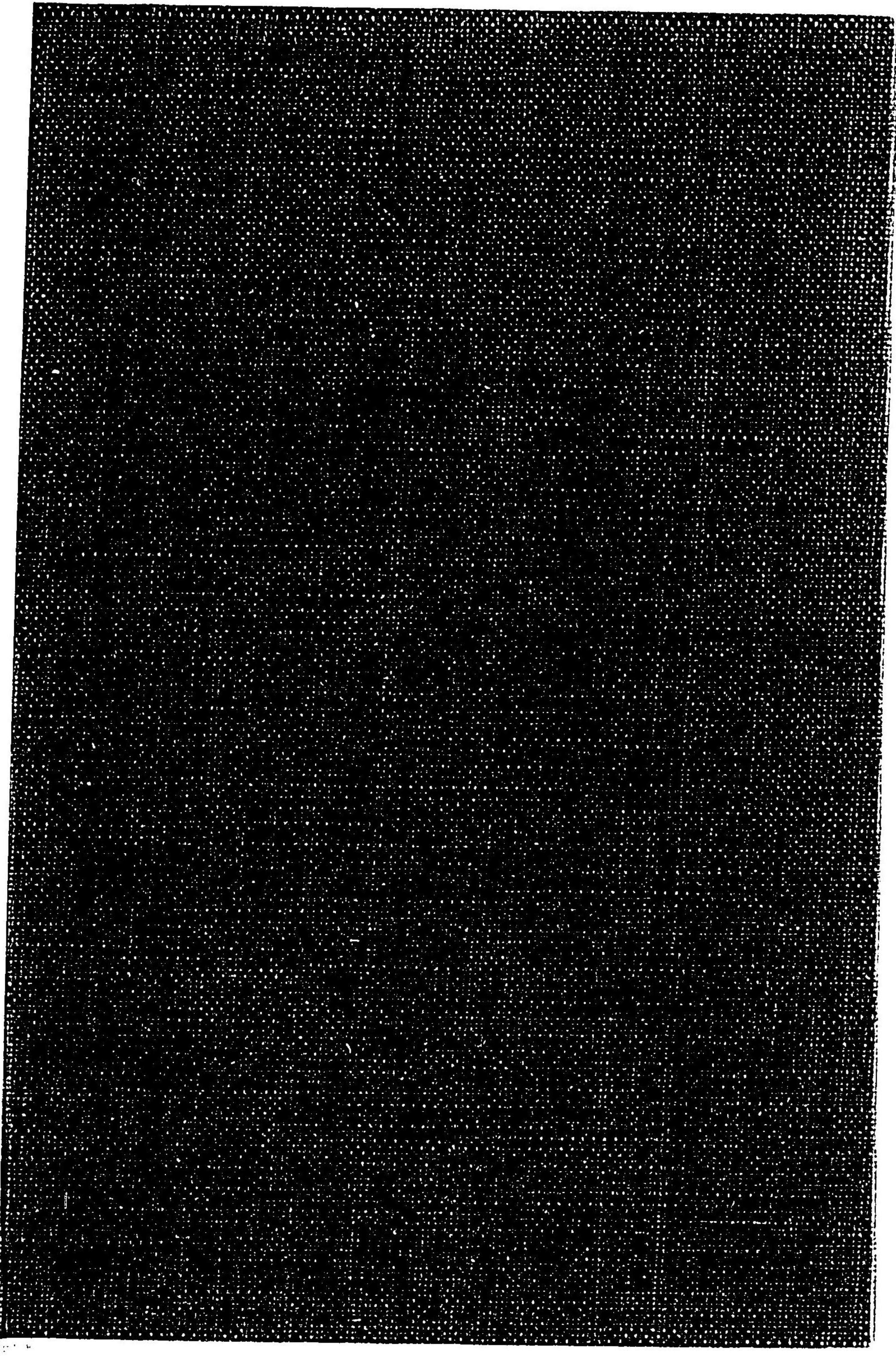
英國今日の社會

大島正健譯

片山潛君著

正價三十五錢
郵稅十二錢







022105-000-8

290. 1 - u 888 t (t)

地人論

内村 鑑三／著

M30

ADA-0476



